

「uniform の女の子」

人物関係図

人物の名前(年齢)

染井 円香(18) 高校三年生

日高 真城(18) 高校三年生

染井 楓(48) 円香の母

染井 郷太(50) 円香の父 故人

野伏 信一郎(18) 真城の彼氏

久保 百合(18) 高校三年生 元チア部部长

担任(50) 男

女子生徒[♂] 真城のクラスメート

男[♂]

男[♂]

○緑岡高校 校門

「卒業式」とある看板

○同・校庭

桜の木、花びらを散らす。

思い思いにはしゃぐ生徒達。

固まって集合写真を撮っている

円香の声「制服は嫌いだ」

○同・職員室

担任（50）と向かい合う形で座る染井円香（18）と染

井楓（48）。

この3人の他に誰もいない。

円香、窓越しに生徒たちが集合写真を撮る様子を眺める。

円香の声「窮屈で、どこか気を遣わなくいけないって思ってたしま
っっ」

○同・校庭

集合写真を撮る生徒達。

その中で前で寝転がってポーズを取る陽気な野伏伸一郎
（18）。

円香の声「ああいう、一見自由そうな人も、窮屈さの中で許され
る範囲の自由をしてるだけで」

○同・職員室

楓、ぼんやりしている円香に苛立ち

楓「ちゃんと先生の話聞きなさい！」

円香、ムスっとし、担任に顔を向ける。

担任、まあまあと楓を諫める。

担任「まあともかく、受験は愚か、就職活動すらしてない生徒さんは染井さん一人だけで……今年の秋から学校にあまり来なくなつた時から声をかけるべきでした。申し訳ありません」

楓「そんな、先生が謝ることじゃ」

担任「幸い、卒業は出来たので社会的には高卒という扱いにはなりません、後は本人の希望次第ですね……」

○同・廊下

「失礼しました」と職員室を出る円香と楓

楓「あんた、これからどうするつもりなの」

円香「どうって」

楓「高校入ってから、チア部も一か月でやめて、勉強もせず、まいには受験も就活もしないって……アンタこの三年間何してきたの!？」

と叱責、その後ため息をつき

楓「お母さん、先帰ってるから」

と廊下をとぼとぼ歩く。

×

×

×

薄暗い照明。

円香、壁に持たれかかりスマホを弄る。

円香「ホント、何してたんだろうね」

円香、顔を上げると美術室前であることに気づく。

円香「……そういえば入ったことなかったな」

○同・美術室・中

円香、ドアを開け、辺りを見渡し

円香「至って普通……って感じ」

と、正面を向くと桜の油絵のキャンバスとイーゼルがぼつんと置かれていた。

円香、その桜の油絵に目を奪われる。

円香「……めっちゃ、上手」

円香、息を呑み、そのキャンパスに触れようとするが

真城の声「誰？」

円香、ハッとし、振り向く。

円香と日高真城(18)、目が合う。

円香「ご、ごめんなさい。凄い、良い絵だなんて」

真城「……あー、どうも」

円香「じゃあすみません。失礼しました」

と去ろうとするが

真城「待ってよ」

円香、立ち止まる。

真城「どこが良いって思った？ これ、私の絵だから」

円香「え……いや。まんま桜で凄くなって。少なくともアタシにはこんな描けないし」

真城「……ふーん」

と、桜の油絵に近づき、眺める。

真城「で、貴方。何者なの？」

円香「な、何者？」

真城「卒業式だったのに一人で微妙な顔して美術室になんて来て。制服着た浮浪者？」

円香「浮浪者って……実は、卒業は出来たけど就職も受験もしてなくて、で、どうしよっかになって」

真城「ふーん」

と、円香の方をまじまじと眺める。

円香「な、なんスカ……」

真城「ねえ。青春ごっこしない？」

円香「え？」

真城「貴方、どうせロクな学校生活じゃなかったでしょ。卒業式の日¹に放浪してるような人間なんだし」

円香「いや、まあそうですけど……」

真城「私もつまんない思い出しかないからさ」

円香「……はあ」

真城「だから、〇月の間だけでいいから、この学校で一緒に過ごさない？」

円香「いや、正直そんな余裕は」

真城「私も、美大目指してたけど、落ちちゃったんだ。だからヒマだし、行く当てもないし、それに」

円香「それに？」

真城「なんか、つまんなさそうな顔してる。貴方。多分、ずっとそうだったでしょ」

円香「……」

真城「名前は？」

円香「染井円香です」

真城「日高真城、よろしくね」

と手を差し伸べる。

円香、少し動揺するが、手を握る

真城、手を放す。

円香、真城の顔を呆然と見る。

壁掛けのカレンダー。日付は「2023年3月1日」

円香の声「その日から、日高真城さんとの「青春ごっこ」という名²の³一か月限りの思い出作りが始まった」

真城の手のひら、小さな切り傷。

○タイトル

○染井宅・外観（朝）

平凡なアパート。

○同・円香の部屋（朝）

円香、ベッドから起きる。

円香、ベッドから離れクローゼットに向かい、制服一式を両手に持つ。

真城の声「ねえ、青春ごっこしない？」

○同・リビング（朝）

窓際に染井郷太（享年50）の遺影。

円香、リビングに入り、食卓テーブルに向かう。

テーブルには朝食と受験専門誌と就活専門誌とメモ。

円香、メモを読む。

メモには「今日中に浪人するか働くか決めてください」

円香、少し沈黙した後、メモをぐしゃぐしゃにする。

○同・円香の部屋（朝）

円香、足音を鳴らすように歩き、部屋に戻る。

円香、パジャマを脱ぎ、制服を着て、髪を結う。

○同・リビング（朝）

完食された朝食と受験専門誌と就活専門誌。

○緑岡高校・美術室・中（朝）

円香、制服姿で椅子に座る。

円香「……ホントに来るのかな」

扉がガララと開く。

円香「真城さん」

と扉の方を見る。

しかし入ってきたのは久保百合（18）

百合「あー確か、見たことあるような。チア部一か月で辞めた人ですよ」

円香「あー、えっと、久保さん、でしたっけ。染井です」

百合「あー染井さん。なんでこんなところに」

円香、「ハハハ……」と苦笑い

円香「ちよつと昨日、忘れ物しちゃって」

百合「そうなんですか！いや私も昨日制服のリボン忘れちゃったんですよ。第二ボタン代わりに取っとけ！って言って色んな子と交換して一緒に写真撮って、気づいたら教室に忘れちゃって」

と円香にスマホの画面を見せる。

スマホの画面は色んな女子とリボンを片手に写真を撮る百合。

百合「この子はチア部の同級生で、この子は女サカ、この子は吹部の幼馴染で……」

と長々と語り続ける。

円香、うんざりとした表情。

真城の声「へー」

と円香と百合の間に唐突に割り込む。

円香、驚き

円香「真城さん！？」

百合、困惑し

百合「えーと、確か、美術部の」

真城「私もリボン、交換したいな」

百合「え、いいんですか!？」

と真城とリボンを交換しスマホを片手に真城と写真を撮る。

円香、その様子を意外そうに眺める。

百合「ありがとうございます! (円香の方を向き) じゃあ円香ち

ゃん、また同窓会とかで会おうね」

と手を振り、美術室を去る。

円香、苦笑いしながら手を振る。

円香「割りと、そういうのやるんですね。真城さん」

真城「意外？」

円香「まあ、」

真城「まあいいじゃん。あいつらの青春は昨日で終わり。あなたの青春は今日から始まる。あいつらより、目いっぱい楽しも」

円香「はあ……」

真城「どっか行ってみたい場所とかある?」

円香「場所……」

と辺りを見渡すと桜の油絵が見える。

円香「あの油絵ってあの桜が見て描いたんですよね?」

真城「うん」

桜が花卉を散らす。

○同・桜付近

桜の木の下のいる円香と真城。

円香、桜をじっと眺め、会話を忘れる。

真城「なんか言ってるよ」

と笑う。

円香「あ、すみません」

真城「桜なんていつでも見れたじゃん」

円香「いや、真城さんって凄いなって」

真城「へ？」

円香「何も無い、白いキャンパスにこんな綺麗な桜を映し鏡みたいに描けるなんて。魔法使いみたいで」

真城「魔法使い、ねえ」

円香「ごめんなさい、なんかこの例え、キモイよね」

真城「もっと絵描いたら、もっと喜んでくれる？」

円香「そりゃ勿論。真城さんの絵、好きですから」

真城「そう……」

円香「ん？」

真城「いや。何でも無い」

円香「あの絵っていつ描いたんですか」

真城「卒業制作ってことで最近作ったやつ」

円香「へえ……」

と、少し視線を外すと遠くに看板を運ぶ高校のスタッフ。

その看板は「卒業式」と。

円香、寂し気な顔し、黙りこくる。

真城「どうしたの？」

円香「あー、いや。私って置いてかれちゃったんだなって」

と苦笑。

真城、看板を運ぶスタッフを見て、

真城「青春ごっこしてんだからさ、もっと高校生面すればいいん

だよ」

円香「え？」

×

×

×

桜の木の下で恥ずかし気に立つ円香。

それを少し離れた場所からスマホで撮る真城。

真城「笑って、笑って。青春の第一歩！ 花のJK！」

円香、口元を少し緩ませる。

シャッター音が連続で響く。

円香、驚き

円香「えー！？ ちょっと」

と真城の元へ駆け寄ろうとするが、こけてしまう。

○ファミレス・中（夜）

呼び鈴チャイムの音。

「少々お待ちください」という店員の声。

テーブルに座り、真城のスマホを眺める円香と真城

スマホのアルバム機能を開くと、📱コマ漫画のように（立

ち姿）↓（驚く様子）↓（駆けだす直前）↓（こける様

様子）の写真が。

円香「📱コマ漫画みたいになつとる……」

真城「驚くのはまだ早いぜ、奥さん」

と編集・加工アプリを開き、円香の微笑の写真を加工で不

自然な満面の笑みにする。

円香「何これ！」

と大爆笑。

「驚く写真をトリミングで顔部分だけ残して集中線を加え

たコメディーションのような加工写真」

「駆け寄ってくる様子の写真を円香の身体部分だけなく

し、制服と靴だけがこちらに迫ってくるような加工写真」

の二枚を円香に見せる。

円香「透明人間じゃん！」

と笑う。

真城も笑い、

真城「送ってあげよっか？」

円香「お願い」

真城「あー、そういやライン交換しなきゃだね」

とラインの友達用QRコードを出す。

円香「えーと、どうするんだっけ」

真城「あーいいや。このコードの画面開いて」

円香、QRコードの画面を開く。

真城「いただきまーす」

と読み込み、友達登録を完了する。

円香「中学以来かも。ライン交換したの」

真城「ホントに友達いなかったんだ。」

円香「うるさいな」

と真城のラインプロフィールを見て

円香「今度、いつ会える？」

真城「またこっちからラインするから」

店員、オーダーを円香と真城の二人に聞く。

真城、メニューを頼む。

円香、その真城の様子を眺める。

○染井宅・外階段（夜）

軽快なステップで階段を昇る円香。

自分の番号である301号室に着く。

○同・玄関（夜）

「ただいまー」と円香の声。

楓、重い足音を立てて、円香の元へ。

楓「アンタ、その格好何？」

円香「あ、いや。ちよっと友達と」

楓「友達って、そんな暇ないでしょ」

円香「……ほっといてよ」

と靴を脱ぎ、自室に向かう。

楓「高校生、もう終わったのに」

円香、ピキツとなり、自室に駆け込む。

楓、ため息をつき

楓「ホント、どういふつもり……」

○同・円香の部屋・中（夜）

円香、鍵を閉め、ベッドにダイブ。

スマホを取り出し、日高のラインを開き

「今日は楽しかった」と打つが、送信するのをやめる

円香、ため息をつく。

○住宅街の外れ（夜）

壁に寄り掛かる真城、スマホを眺める。

そこに野伏からのライン

「出来ることあったら、何でも言って」

真城、そのラインを未読無視し、スマホをポケットにし
まう。

真城「……相変わらず、勝手」

○同・円香の部屋・中（夕方）

夕日の光が差し込む。

円香、制服姿でベッドに横たわっている。

スマホのロック画面が8月12日を指す。

ロック画面では楓からのライン。

「いつまでそうしてるの」や「いい加減にして」とある。

ラインの通知が鳴る。

円香、細い目で見る。

寄越した人は真城だった。

円香、驚いてベッドから起き上がる。

○緑岡高校・美術室・中（夕方）

真城、桜を眺める。

そこへガガガとドアを開け、

円香「ハアハア……真城さん！ ごめん、遅れちゃって」

真城「お、来た。返信も既読もつかなかったから死んだのかと」

円香「いや、ごめん。ホントに」

真城、円香に近づき円香の身体をクンクンと嗅ぐ。

円香「え、ちよ。何……」

真城「中々に香ばしい臭いが」

円香、顔を赤らめ

円香「ごめん、最近お風呂入ってなくて……ずっと寝ちゃって」

真城「ふーん、じゃあお風呂入る？」

円香「そうだね……ってどこで？」

○同・プール（夜）

真城、プールと校庭を隔てる柵をよじ昇り、飛び越える。

円香、緊張し、ぐだぐだしながら柵を飛び越える。

円香「流石に不味いのは……っていうかお風呂って」

真城「うん、これ」

と飛び込み台に向かう。

円香「汚いでしょ！」

とプールの水を掬うがすぐに離し

円香「しかも滅茶苦茶冷たいし」

真城、飛び込み台に立ち、そのままプールへダイブ。

円香「えー！ ちょっと」

真城、顔を覗かせ、仰向けで浮かぶ。

真城「早く入りなよ。臭いんだから」

円香「えー……イヤ」

真城「なんで」

円香「やっと制服好きになれそうだから。汚したくない」

真城「好きになれたのって私と青春ごっこしてるから？」

円香「まあ」

真城「じゃあ入ってくれなきゃ青春ごっこ辞める」

円香「えー、もう」

と恐る恐る水に浸かる。

真城、その円香の足を引っ張る。

円香、絶叫。

円香、顔が水中に沈んだ後、顔を覗かせ、仰向けに浮かぶ。

円香「寒ッ！」

真城「制服着た学生って個性のないロボットみたいじゃない？」

円香「え？」

真城「だって、学校中どこ見渡しても紺色ばっか。その紺色に合わせようとして結局皆似たり寄ったりな髪型になるし」

円香「まあ、確かに」

真城「このリボンも、かわいいの塊でーすって顔してるけど皆付けてるからかわいいもへったくれもない」

円香「……私、集合写真が嫌いで」

真城「ん？」

円香「みんな似たような髪型で、同じ制服で、同じポーズを取って、まるで皆ロボットみたいに。自分には個性も才能もないって言われてるみたいに感じて」

真城「なかなか尖ってるねえ」

円香「笑っちゃうよね。実際自分には才能も個性もないって分かってるのに」

真城「私もそのロボットの一体？」

円香「いや、真城さんは絵の才能あるし。この高校で一人だけ美大受けてるし。凄いつて」

真城「やっぱ、私の才能とか個性って、絵を描くことなのかな」

円香「それは……少なくとも、私は阿野さんの、真城の絵が好きだから」

真城「美大落ちたって言ったじゃん」

円香「あ、はい」

真城「あれ、落ちてやった、が正解」

円香「え？」

真城「いや美大の受験って集団でやるから隣とかの受験生の絵ちらっと見えるんだけど、みんな似たり寄ったりでさ。いや石膏デッサンだから当たり前なんだけど」

と、足を底に付け、プールサイドに向かう。

真城「モノ言わぬお絵描きロボットに私もなるのかなって思って、中指立ててやったって話」

と、梯子を上り、プールサイドに座る。

円香、笑う。

真城「なに？」

円香「なんか、似たもの同士だね。私たち」

と、真城を追うように足を付け、プールサイドに向かう。

真城「あ、後100数えて。それまで出ちゃダメ」

円香「えー、上がらせてくださいよ！ さつきから鼻がむずむずしてしうがなくて」

真城「駄目。じやなきや青春ごっこやめる」

円香「えー、いーち。にー。さーん」

と数えるがくしやみをする。

真城「くしやみした。もう一回1から」

円香「どんなルール!？」

真城「はいはい、数えてあげるから。いち。にー」

と10まで数えるが、くしやみをする。

真城「……やり直しで」

円香「ハア!？」

と叫び、こだまする。

○染井宅・円香の部屋（夜）

制服が掛けられ、乾かさられている。

円香、真城のラインを開き「今日はありがとう」と送る
すぐに既読がつき

円香「既読はやっ」

と少しニヤける。

以下、ラインの文面

円香「今日はどこ行こう」

真城「ねえ、私の行きたいところ、行っていい」

円香（いいよ! というスタンプ）

ラインの文面、終わり。

円香、ニヤニヤしながらスマホを眺めるが、メッセージ
が返ってきた瞬間

円香「……マジすか」

と笑顔が消える。

○同・玄関（夜）

水が滴り、びしょびしょの円香の靴。

それを無言で見つめる楓。

○緑岡高校・チア部部屋前

○同・チア部部屋・中

円香、不満気。

円香「なんで、ここ……?」

真城「私の部活の部屋はずっと見てるわけだし、円香の部屋も見
てみたいじゃん」

円香「いや、一か月も続かなかったし……」

と、辺りを見回すと壁に落書きが。

「2023年度 卒業生一同」とあり、下にメンバーが一
つずつコメントをマッキーで残されている。

その中に久保百合のコメント

「皆のこと忘れないから！ BFF♡ by ♡」
とある。

円香、そのコメントに気づき

円香「私の事忘れてた癖に」

と履き捨てるように言うが正気に戻り、

円香「いや、ごめん。そりゃ、一か月しか来なかったやつのこと
なんて忘れてるよね。ハハハ」

真城「ヘンな部活だね、チア部って」

円香「変って、何が」

真城「だってさ、応援なんて誰でも出来るじゃん」

円香「……うーん、まあ」

真城、棚の上に置かれてあるチア部のユニフォーム
に気づき、

真城「チア部のユニフォーム、こんなキヤピキヤピしてるんだ」

円香「まあね」

真城「これ着てる円香、見たかったー」

円香「やめてよ」

とぶっきらぼうに

真城「そんなここ嫌なの？」

円香「まあ、高校で一番最初に挫折したっていうか、諦めちゃった場所だから」

とユニフォームを手に取り

円香「チア部続けてたら、こんなことにならなかったのかな」

真城「でも続けてなかったお陰で私と会えた」

円香「そんなエモい話じゃないよ」

と沈黙。

真城、マッキーを取り出しそのコメント群の横に大きく

「クソくらえ」と書く。

円香「ちよいちよいちよい」

と真城の元に駆け寄り

円香「何してんの」

真城「他人のキラキラエモエモ青春を潰してやっただけ。ワクワククしない？」

円香「ワクワクって」

真城「やりなよ、円香も。楽しいよ」

円香、ポンポンが敷き詰められた箱を見つけ、深呼吸した後、ドカンと蹴る。

円香「あーウザイ！ お前らばっか、青春全部楽しんで！ 何が

アオハルだよ。ウザイウザイウザイ！」

と横転した無数のポンポンを乱暴に投げる、蹴る。

真城「いいねえ」

と、ポンポンを投げるが円香の顔に的中。

真城「あ、ごめ」

円香「……やったな！」

と真城に向かってポンポンを投げる。

真城も応戦。

円香「ウザイウザイウザイ！」

真城、ニツつと笑い

真城「うざーい」

とポンポンを投げ続ける。

真城と円香の表情は満面の笑み。

○同・部室前（夕方）

夕日が差し込む。

チア部部室から聞こえる大きな物音とはしやぎ声。

○染井宅・円香の部屋（夜）

寝ている円香、目を開ける。

○同・廊下（夜）

トイレに向かう円香、足が止まる。

トイレから楓のすすり泣く声が聞こえる。

円香、ノックしようとするが、止める。

○コンビニ・外観（夜）

○コンビニ・中

円香、ジャージ姿でトイレから出る。

野伏（声）「だから、俺をもっと頼ってくれよ！」

円香、野伏の声に反応し、近づく。

激昂する野伏と澄ました顔の真城が喋っている。

その様子を隠れて見る円香。

真城「もういいから」

野伏「またそれかよ。そうやってのらりくらりと、人に全く期待してないような目で。俺、お前の彼氏なのにお前の事全く分かんねえよ！」

真城「いいよ、分かんなくて」

と去る。

野伏「日高！」

と追う。

円香、呆然。

○緑岡高校・美術室・中(朝)

カレンダーは変わらず3月1日

制服姿の円香、カレンダーの方を呆然と眺め、座る。

× × × (フラッシュ)

回想

激昂する野伏と澄まし顔の真城

× × ×

円香「彼氏、いたんだ」

とハッとし

円香「いや、そこじゃなくて！ もうどうすればいいんだか」

足音が近づく。

円香、反応し廊下側の窓を振り向く。

そこには廊下を歩く楓。

円香、驚き、楓から見えないように屈む。

○同・廊下(朝)

楓、会釈し職員室に入る。

円香、忍び足で職員室まで近づき、ドアの小窓から中の様子を見る。

職員室では楓と担任と楓が喋っている。

担任の机には就活雑誌と受験雑誌と資料。

時には担任が喋ったことをメモする楓。

円香、目を背ける。

○同・屋上・外

警備員が屋上に繋がるドアの鍵を閉め、去ろうとする。

と、そこへ真城が現れ、ぶつかる。

「すまない。大丈夫？」と聞く警備員。

真城「いえいえ、こちらこそすいません」

と笑顔で

ドアには「立ち入り禁止」と張り紙が。

○同・屋上

真城、ドアを開け、屋上に入る。

遅れて円香も入る。

円香「ちよっと、流石に不味いんじゃ」

真城「偶然警備の人とぶつかって、たまたま鍵が手の平にあって、

気が付けばドアを開けてしまってただけ」

円香「無理あるって」

真城「わざわざ閉めて、入るな！なんて言ってる学校側が悪い。

うん。入るなって言われたら入りたくなる」

円香「自殺防止とか一応理由はあるし」

真城、意に介さず寝転がる。

真城「あーキモチイイー！」

と背伸び。

円香、体育座り。

真城「円香もやりなよ」

円香「いや、いや」

真城「そう」

と背伸び。

円香「あのさ、やめない？」

真城「そんなビビッてんの？ 屋上に来たくらいで」

円香「いや、その。青春ごっこ」

真城「なんて？」

円香「だから、青春ごっこやめない？って」

真城「……なんで？」

円香「やっぱお互いそれぞれ頑張らなきゃいけないって。

三月ももう終わっちゃうし」

真城「頑張るって、何を」

円香「それは、真城さんなら絵の勉強で」

真城「円香は？」

円香「それは、その」

と言い淀む円香を遮り

真城「あんま適当抜かすんじゃねえよ」

と冷たい口調で

円香、圧倒される。

真城「アンタさ、私のこと同類だとも思ってるでしょ。居場所
がなくて、でも反骨精神だけは立派の情けない生き物だって」

円香、押し黙る。

真城「でもね、私はアンタと違って他人をロボットだなんて見下
さずちゃんと人間関係作ってきたし、絵の才能だってある」
と、立ち上がり

真城「他人がロボットって言うならアンタは何もでき

ないガラクタ、違う？」

円香「だから、せめてロボットくらいにはなれるように」

真城「今更？」

円香「貴方だって向き合わないといけないこととか心配してくれてる人だっているでしょ」

真城「例えば？」

円香「その、絵の事とか、彼氏さんとか」

真城、ため息をつき

真城「なんか、シラケちゃった。いいよ。やめよつか青春ごっこ。

元々空っぽなアンタに付き合っただけだし」

と、扉に向かう。

円香「ちよつと待って」

真城「アンタが止めようって言ったんでしょ。何？ 怖いの？ そりゃそうだよね。だってアンタの居場所、私の隣しかないもん」

円香、言い返そうとするが、言葉が出ない。

真城「もういいや。目の前から消えて。それこそ飛び降りてもいいから」

と去る。

円香、立ち尽くす。

○染井宅・キッチン（夜）

楓、調理をする。

○同・円香の部屋（夜）

ベッドに横たわりスマホを見る円香。

真城のラインを開き「ごめんね」と打とうとするが

円香「……」

とスマホを手放す。

そこへコンコンとノック音。

円香、寝たふりをする。

楓（声）「壁越しでいいから聞いて」

○同・円香の部屋・前（夜）

楓、座り込み

楓「円香って、何になりたいとか、何をやりたいとかある？」

返事が来ないが続けて

楓「そんなの、難しいよね。私ね、5年ちよい位生きてきたけど、未だに自分が何をしたいのか何になりましたかかったのか分からない。でも気が付いたら円香のお母さんになって」

○同・円香の部屋（夜）

楓（声）「お父さんが死んじゃって、お金もそんなになくて。何か才能があれば一稼ぎできるのになって何度も思った。でもね、そんな才能なんてないし、あったとしてもそれを見つけない時間なんてなかった」

円香、黙って聞く。

○同・円香の部屋・前（夜）

楓「もう青春は終わっちゃって、後悔してると思うかもしれないけど。でも、「なりたい円香」を見つかる時間は十分にあると思う」

と立ち上がり

楓「ご飯、用意したから。気が向いたら一緒に食べたいな」と去る。

○同・円香の部屋（夜）

円香、ベッドから起き上がり

円香「なりたい私……」

と立ち上がり、扉の鍵を開ける。

○同・リビング（夜）

楓、一人で夕ご飯を食べる。

そこへ円香が現れ、席につく。

円香「その、今まで。ごめんなさい」

と頭を下げる。

楓「ま、腹が減ってはなんとやらって言うし。色々考える前に食べようよ」

円香、ガツガツご飯を食べる。

楓「いただきますくらい言いなさいよ」と微笑。

円香「（ご飯を頬張り）いひゃひゃきまふ（いただきます）」と涙目で。

楓、円香の顔がツボに入り、笑う。

円香、ご飯を飲み込み、涙でぐちよぐちよになりつつ笑う

円香と楓、テーブルを囲み、座る。

テーブルには受験専門誌と就活専門誌。

楓、その二冊を手に取り「どっちがいいか」と。

円香、悩んだ末、受験専門誌を指さす。

楓、赤本を円香に手渡す。

円香、赤本を読むが訳が分からず目が回る。

楓、爆笑。

○緑岡高校・外観（朝）

○同・職員室（朝）

円香、担任に向かって会釈。

×

×

×

受験専門誌と資料が開かれてある机。

円香、担任の話に熱心にメモを取る。

×

×

×

円香、頭を下げ、職員室を去る。

○同・チア部部室・中

散らかったポンポンを片付け、真城が書いた「クソくらえ」を雑巾で消す。

○同・美術室

円香、扉を開け、入る。

カレンダーは3月1日のまま。

それをめくり、3月26日にし、元に戻す。

と、足を進めると何やら反応を感じ、足裏を見る。

足裏には桜の花びらが描かれた油絵のキャンバスの破片。

足元を見ると、あの桜の油絵がぐちゃぐちゃにされている。

○同・女子トイレ

真城、出血をしている右手を洗面所で洗う。

洗面所には血まみれのカッター。

真城、息を切らしている。

○同・女子トイレ前

トイレから出る真城。

そこに偶然、円香が真城を横切る。

円香、少し動揺するが、足を進める。

真城、拳を握りしめ、立ち尽くす。

○同・美術室（真城の回想）

桜の木が窓から見える。

それをモチーフに桜の油絵をキャンバスに描く真城。

カレンダーの日付は2022年4月11日。

○同・校庭（日替わり）

様々な部活が新入生相手に勧誘活動をしている。

○同・美術室・前

「新入生募集！」のポスター

○同・美術室・中（夕方）

イーゼルに掛かってある桜の油絵。

黒板には入学おめでとうとカラフルに書かれている。

真城、椅子にだらんと座りこむ。

○同・教室（日替わり）

授業中。

黒板にはチョークで「進路を決めよう」

教師が教壇で話している。

生徒の机には進路希望調査の紙。

真城の横の席の女子生徒♫、ひそひそと話しかけてくる。

女子生徒♫「日高さんって、やっぱ美大？」

真城「一応」

女子生徒♫「すご。絵上手いのって本当なんだ」

真城「まあ、誰にも絵、見せたことないから」

女子生徒♫「へー、見てみたいな。日高さんの絵」

真城「……良かったら、美術室来てよ。美術部の部員、私しかいないし」

女子生徒♫「あーね。分かった。考えとく」

と笑う。

真城、微妙な表情。

○同・美術室（夕方）

カレンダーは7月22日

桜の木は新緑に染まっている。

イーゼルに掛けられ、展示してある桜の油絵。

真城、桜の油絵に向き合うように座る。

真城≧「誰も私の絵に、興味なんてなかった」

真城、立ち上がり、窓から校庭の様子を見下ろす。

校庭ではサッカー部や陸上部が各々活動中。

○同・校庭（夕方）

野伏、スポーツウェアの服装でサッカー部部員を招集し、
、円陣を組み

野伏「明日が三年最後の試合……にならないよう、目いっぱい出し切ろう！」

オウ！と全員で叫び、締める。

野伏、円陣をやめた後、美術室の窓から顔を出す真城に
気づき、手を振る。

真城、合わせるように手を振る。

真城 ≪「私のことを好きな人はいる。でも私はその人を」

○美術大学・校門(日替わり)

受験会場はこちら、という立て看板。

○同・受験会場

モチーフとして置かれている石膏。

道具を持ち、キャンバスに向き合い、石膏デッサンを描く
受験生達。

真城、キャンバスに向き合うが何も描かない。

時計の針の音と鉛筆の擦る音。

真城、息を呑む。

○緑岡高校・美術室(日替わり)

イーゼルにかけられてある桜の油絵。

真城、美術室の扉にくっ付いてある「新入部員募集」のポ
スターをぐちゃぐちゃにする。

桜の油絵のキャンバスの裏には 2022 4/11。

○同・校庭(日替わり)

卒業式。

桜の木が花卉を散らす。

はしゃぐ生徒たち。

その中で野伏が集合写真で寝転がっている。

野伏、撮り終わった後に校内へ。

○同・廊下

とぼとぼと歩く真城。

野伏（声）「真城」

と真城の元へ歩み寄る。

真城「卒業おめでとう。後、受験も」

野伏「ありがとう、じゃなくて。あの。俺、応援してるから。絵の事とか全く分かんないけど、真城がずっと頑張ってきたことは無駄じゃないって信じたい。勝手な押し付けかもしれないけど」

真城「うん、そうだね」

野伏「だから、なんかあったら頼ってよ。俺の事。じゃあまた」と去る。

真城「うん、そうだよ。勝手すぎるよ」

とポケットからカッターナイフを取り出し刃をむき出しにする。

○同・美術室

美術室に入る真城。

そこには桜の油絵に目を奪われている円香。

真城、カッターナイフを咄嗟に隠す。

その時、手に軽い切り傷が出来る。

真城「誰？」

円香、驚き、振り向く。

円香「ご、ごめんなさい。凄い、良い絵だなんて」

真城「……あー、どうも」

円香「じゃあすいません。失礼しました」と去ろうとするが

真城「待ってよ」

円香、立ち止まる。

真城「どこが良いって思った？ これ、私の絵だから」

円香「え……いや。まんま桜で凄いなって。少なくともアタシにはこんな描けないし」

真城「……ふーん」

と、桜の油絵に近づき、眺める。

(回想終わり)

○染井宅・円香の部屋(夜)

円香、ビニール袋から桜の油絵の破片の数々を勉強机に広げる。

破片を一つ一つ見ていくと「22」と書かれた破片を見つける。

円香「にじゅう……に？」

円香、破片をガサガサと探る。

数字が書かれた破片を見つけ、繋げると、「2022 4 / 11」となる。

○市街地のはずれ(夜)

地べたに座り込む真城。

そこへ男aと男bが近づき

男a「お嬢ちゃん、風邪ひくぜ？ おじさんが暖めてあげよつか？」

男b「お前、流石に高校生は」

男a「バーカ。だから燃えるんじゃないか。しかも最近の『a』は貞操観念も股も緩いって聞くし」

男aと男b、ギヤハハと笑う。

真城「ねえ」

男b「ん？」

真城「何に見える？ 私のこと」

男^B「そりや制服着てんだから」^アだろ。ワケの分からんことを」

男^ロ「それよりお金出すからちよくと俺たちに付き合ってくれ

ね？ ちよくと色も付けといてやるからさ」

真城「もういいや」

男^B「は？」

真城、男^Bの股間を蹴り上げ、逃げる。

男^B、悶絶する。

男^ロ「オイ！ ちよつと待て」

と追う。

男^B、股間を抑え

男^B「お、置いていかないで……」

○河川敷（夜）

走る真城、足を止める。

真城「ここ、どこ……」

と顔に桜の花びらが乗る。

真城、見渡すと桜の木が。

×

×

×（フラッシュ）

回想

桜の木の下で円香の写真を撮る真城。

×

×

×

屋上。

真城と円香。

真城「アンタが止めようって言ったんでしょ。何？ 怖いのか
怖いよね。だってアンタの居場所、私の隣しかないもん」

円香、言い返そうとするが、言葉が出ない。

真城「もういいや。目の前から消えて。それこそ飛び降りてもい
いから」

と去る。

× × × (回想終わり)

○河川敷(夜 戻って)

真城、桜を見上げ

真城≧「あの居場所に一番こだわってたのは、私の方だ」

と、スマホの通知音に気づく。

ラインの通知で、相手は円香。

「明日、美術室に来て。私に応援させて」

とメッセージとキャラクターがチアガールのコスチュームを

真城「……円香」

○同・円香の部屋(朝)

円香、制服に袖を通し、リボンを付け、髪を結う。

○同・リビング(朝)

楓「学校に？」

制服姿の真城

円香「うん、行ってくる。卒業した娘の制服姿なんてもう見たくないかもしれないけど」

楓「受験の事また聞きに行くの？」

円香「そうじゃないから、先に謝っておこうかなって」

楓「いいよ、いってらっしゃい」

円香「……う、うん。ありがとう」

楓「どうしたの」

円香「いや、もっと反対されるかなって。散々今まで遊んできたのに、そんな暇なんてないって」

楓「まあ思うところがないことはないけどさ。久々に見たもん。

円香が自分から進んで行くの。それぐらい自分がしなきゃいけないって、やらなきゃいけないって思った事があるんじゃない？」

円香「……ありがとう」

とカバンを持ち、外を出ようとする。

楓「円香」

円香「ん？」

楓「行ってらっしゃい」

円香「行ってきます」

○緑岡高校・廊下

廊下を歩き美術室へ歩く真城、覇気が全く感じられない。

美術室前で足が止まる。

中から何やらガサゴソと音が聞こえる。

真城「……円香？ いるの？」

と扉を開けようとするが

円香（声）「あー！ ちょっと待って！」

真城、扉を開けないが、困惑。

と、美術室からアップテンポなBGMがかかったり、止まったりする。

円香（声）「音量どうしょ。スピーカーは買ってきたけど」

とBGMをつけるが爆音が過ぎる。

真城、思わず耳を塞ぐ。

円香（声）「あー、違う違う」

とBGMを下げる。

円香（声）「うーん、ちゃんとしたスピーカー勝った方が良かったかな……やっぱりBGMはちゃんと聞こえた方がいいよね。うー

ん、ちょっと買ってこようかな。えーとこっからドンキは…
…歩いて20分か。真城さん、後40分くらい待てる？」

真城、ついに辛抱ならず、扉を乱暴に開ける。

円香（声）「あーちよっと！」

○同・美術室

真城「いい加減にして！……って」

真城とポンポンを両手に持つ制服姿の円香。

円香「あ、ごめん。待たせすぎちゃったか」

真城「何、持ってんの」

円香「これチア部のポンポン、拝借してきたんだ」

真城「なんで、持ってんの」

円香「言ったじゃん。応援させてって」

真城「へ？」

円香「まあ、座って座って」

と椅子に真城を座らす。

円香、真城に向かい合って膝立ちをする。

円香「あ、そのスピーカーに繋がってるスマホの再生ボタン押し
てくれない？ そうしてくれれば始まるから」

真城「始まるって……」

と少し困惑した後、意を決してボタンを押す。

アップテンポなBGMと円香、それに合わせて立ち上がり

ポンポンを振って踊る。

円香「ワン！ ツー！ スリー！ フォー！ Go！ マシロ！

ヒダカ！ Go！」

と踊り続け、最後にポンポンを振り、

円香「マシロ！ ファイト！」

と曲が終わりポーズを取る。

真城「えーと、ど、どういう……」

円香「何回も言ってるじゃん。日高真城を、応援させて、って」

真城「別に応援なんて意味ないし、欲しいとも思っていない」

円香「前、真城さんのこと魔法使いたいだって言ったけど、ア
ンタ、もう魔法使えないんじゃないの？」

真城「……！」

円香「真城さんの事全部鵜呑みにしちゃってたからあの桜の油絵、
最近の作品かと思ってたけど。あれ、一年も前の作品じ
ゃん。他に調べたけどこれより後の作品ないし」

真城「……別に、描かなかっただけ」

円香「そう言っつてずっと誤魔化すの？ 受験の時みたに」

真城「……何？ 人の心見透かしたつもり？」

円香「そんなんじゃない。もっと単純な話」

真城「じゃあ、何。その単純な話って」

円香「私は、貴方の絵が好きだから、素敵だと思ったから。貴方
と貴方の描く絵を応援したい。それだけ」

真城「……くだらない。そんなのただの押し付けじゃない」

円香「別に描くのをやめてもいいよ。真城さんが決めることだし。
でも、もし私が応援することで真城さんが絵を描けるん
なら、私は応援し続けたい」

真城「円香……」

円香「前に、応援なんて誰でも出来るって言ったけど、本当にそ
う思う？ 本当に誰でもいいの？」

真城「私は……」

×

×

×

回想

美術室。

桜の油絵を褒める円香

×

(戻り)

×

×

真城、息を呑み

真城「……がいい」

円香「え？」

真城、立ち上がり

真城「円香がいい！ 円香に応援してもらいたい、絵を褒めてもらいたい、私の絵で、円香を感動させたい！」
と涙を流す。

真城「ホントは卒業式のあの日にあの油絵を滅茶苦茶にするつもりだった。誰にも見てもらえなくて、辛くて、ずっと一人ぼっちで、私の絵なんて意味ないのになって」
円香、黙って聞く。

真城「でも、貴方があの日見つけてくれた。褒めてくれた。だから貴方の事が、好きになっちゃって」
と泣き続ける。

円香、笑って、真城を抱擁して

円香「私も、真城ちゃんの絵を見て、いっぱい感動したいし、いっぱい応援したい」

真城「円香……円香……！」

円香と真城、より熱い抱擁を交わす。

○同・桜付近

苦い顔をしている円香。

円香「えっと……」

真城、イーゼルに掛かっているキャンバスに向き合う。

円香、制服にポンポンを持たされ桜の木の下に片足立ちのポーズで立たされている。

真城「ちよっと、動かないで」

円香「無理っすよ、真城サン……あー痛ててて」
と体制を崩す。

真城「応援するんでしょ、私の事」

円香「いやまあ、しますけど」

と片足立ちでポーズを決める。

真城「じゃ、後三時間お願い」

円香「三時間!?!」

と驚き、足を攣り

円香「痛ったあああああああああ!」

と倒れる。

真城「あ、スマホに撮ってそれ見ながらやれば良かった」

円香「それ、もっと……」

と足を抱え

円香「早く言えー!」

桜が花びらを散らしている。

○染井宅・円香の部屋（日替わり・夜）

円香、勉強机に向かい、勉強する。

円香≧「制服は嫌いだ」

制服が掛けられている。

円香≧「窮屈で、どこか気を遣わなくいけないって思ってしまった」
っ」

と制服を見る。

○画塾・中

多くの生徒がデッサンの勉強をしている。

その中に真城がデッサンの勉強をしている。

円香≡「でも、この制服のお陰で、素敵な人と会えた」

○染井宅・円香の部屋（夜）

円香、立ち上がり制服に触れる。

円香≡「もう着ることはないけど、感謝してる」

○緑岡高校・美術室（夜）

「卒業制作」と黒板に書かれ、その付近に「桜の木と制服の女の子がポンポンを持ってポーズを取っている」油絵。

円香≡「だって、お陰でその素敵な人と一緒に、卒業できたから」

（終わり）